



TITLE:

京大広報 No. 208

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 208. 京大広報 1981, 208: 43-50

ISSUE DATE:

1981-01-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209478>

RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 208

京都大学広報委員会



新年名刺交換会（1月5日京大会館）—関連記事本文44ページ

目 次

新年を迎えて……………総長 沢田 敏男…	44
新年名刺交換会……………	44
部局長の交替……………	44
自衛消防団員に感謝状贈呈……………	45
長尾雅人名誉教授、田畑茂二郎名誉教授日本学士 院会員に選ばれる……………	45
外国人留学生懇親会……………	46

＜紹介＞	
理学部・琵琶湖古環境実験施設……………	47
＜随想＞	
専門と非専門……………名誉教授 杉村 敏正…	48
第82回化学研究所研究発表会……………	49
＜保健コーナー＞	
アルコールと健康……………	49
日 誌……………	50

新 年 を 迎 え て

総長 沢 田 敏 男

明けましておめでとうございます。

年頭にあたり、ご挨拶を申し上げます。1981年は世界的にみて、政治・経済あるいは外交上いろいろ困難な問題が山積しており、また、その問題処理や事象の解明にあたって、大変見通しのむずかしい不透明な年であるといわれています。しかし、このような困難な年であればあるほど、人類の叡智を結集してこれを乗り越えるべく努力しなければなりません。すなわち、なによりもまず、国際間の信頼を回復し、信義を尊重しあい、平和な国際社会を建設し、保障することに努力しなければならぬと考えるものであります。

我が国が、これから先の困難な世界に生きてゆく道は、科学技術の分野で人類の幸福増進に貢献し、この分野でもって主要な国際的役割を果たすことであると考えます。中でもとくに、我が国の位置するアジアの国々に対し、経済・科学技術協力などの面で、どれほど有意義な貢献をなしかねるかということが大切であると申せましょう。またこのことが、全人類的な課題である、いわゆる南北問題の解決にもつながることであると確信します。

このような人類的課題を正視するとき、大学人として、また科学者としての社会的責務の重大さを痛感するものであります。そして、大学に対する国家・社会の負託は、益々大きくなってきていると考えられます。

京都大学は創立84年目を迎えましたが、これまでの輝かしい学問的業績や歴史、伝統に照らしてみると、これからは一段と開かれた大学、また、国際的大学として、世界各国の大学との学術交流を推進し、より一層研究・教育の発展を計ることが大切であると考えます。さらにまた、アジアの国々にとの学術交流についても積極的に取り組み、これらの国々への学術の進展に貢献できるよう努力してまいりたいと念願するものであります。

私は総長に就任し、2回目の新年を迎えましたが、これまでの約1年間の経験や反省を踏まえて、今後の大学の管理運営にあたっては、以上の事柄等を含めて問題意識を鮮明にし、重点的に取り組んでゆきたいと考えております。そして、具体的にはこれまで努力目標として掲げてまいりましたような研究・教育の場としての条件整備や、大学における人間形成の問題等について、より一層その具現化に向けて努力してまいりたいと決意を新たにしております。皆様のご理解とご協力を切にお願い致します。

＜大学の動き＞

新年名刺交換会

本学恒例の新年名刺交換会が、1月5日午前10時から京大会館において、沢田敏男総長をはじめ平澤 興、奥田 東、前田敏男、岡本道雄歴代総長、名誉教授、教職員約400名の出席を得て行なわれた。

初めに沢田総長から新年の挨拶があり、次いで平澤元総長の発声による乾杯ののち歓談、10時30

分松田長三郎名誉教授の発声で万歳を三唱し散会した。

部局長の交替

農学部附属農場長

1月1日、山縣弘忠農学部附属農場長の任期満了に伴い、その後任として栗原 浩農学部教授（作物学講座担当）が任命された。任期は、昭和57年12月31日までである。

経済学部長

1月10日、中村 哲経済学部長の任期満了に伴い、その後任として渡瀬 浩経済学部教授（経営政策講座担当）が任命された。任期は、昭和57年1月9日までである。

自衛消防団員に感謝状贈呈

12月23日（火）午前10時から、本部事務局長室において、日頃の自衛消防団員の苦勞に対する総長からの感謝状が贈呈された。この日感謝状を受けた団員は、奥田三男、谷川清二、鶴子孝夫（以上経理部）、森 清（経済学部）、秋山和司、寺田雅夫（以上化学研究所）、岡村恵二、畑 幸一（以上原子エネルギー研究所）、有本文雄、山本安弘（以上木材研究所）の各氏である。

このあと、午後2時から、本学自衛消防団と左京消防署合同による消防演習が北部構内理学部宇宙・地球物理学教室を中心に行なわれ、本学自衛消防団の日頃の訓練成果が披露された。



長尾雅人名誉教授、田畑茂二郎名誉教授 日本学士院会員に選ばれる

このたび、長尾雅人名誉教授および田畑茂二郎名誉教授が日本学士院会員に選ばれた。

以下に両氏の略歴、業績等を紹介する。

長尾雅人名誉教授



長尾名誉教授は京都市出身、昭和6年京都帝国大学文学部哲学科を卒業、東方文化研究所（のち人文科学研究所）研究員を経て昭和24年京都大学助教授に任ぜられ、26年教授に昇任、文学部において仏教学講座を担当された。昭和46年本学停年退官後は53年まで鉄鋼短期大学教授であった。この間、昭和34年には共同研究『居庸関』によって日本学士院賞を受賞され、京都大学文学部長、国際仏教学会会長、海外諸大学客員教授などを歴任され、現在も日本チベット学会会長、東方学会常務理事、日本印度学仏教学会評議員などとして活躍されている。

同名誉教授の学業はインド、チベット、中国にわたる大乘仏教の教理、特に中観と唯識の思想の研究を基軸としている。近時の世界における大乘仏教研究は、サンスクリット文献のほかにチベット文献を導入することによって画期的な発展を遂

げたが、同名誉教授の研究活動がその大きな推進力になってきたことが特に注意される。

チベット学者としての同名誉教授の最初の業績は、1939年夏及び1943年5～10月の2回にわたる蒙古ラマ廟調査によって挙げられた。その結果は『蒙古喇嘛廟記』（1947年）及び『蒙古学問寺』（同年）として発表されている。その後、同名誉教授はチベット最大の宗教哲学者、黄帽派の開祖ツォンカパの主著『菩提道次第論』の読解と研究に勉め、ツォンカパに至るまでのチベット仏教の思想史を整理し、彼の伝記とこの論の成立と内容を詳述し、この論の中核をなす部分の和訳と註記、さらにツォンカパ全集目録を付して、労作『西藏仏教研究』を1954年に出版された。

中国北京西北の居庸関過街塔雲台の実地調査は1943年村田治郎教授らによって行なわれたが、人文科学研究所に所蔵されていたその膨大な資料は戦後本格的に研究された。その門洞内壁にはサンスクリット文「仏頂尊勝陀羅尼經」「如来心陀羅尼經」及び付加呪文がランチャ、チベット、パクバ、ウィグル、西夏、漢字の六体の文字によって刻まれている。同名誉教授は二つの陀羅尼を克明に研究してサンスクリット原形を復元し、またチベット小字「造塔功德記」の和訳をも行ない、居庸関の調査研究に重要な寄与をなした。

同名誉教授の文献学における世界的名声をいよいよ高からしめたものは『大乘莊嚴經論の梵藏漢

索引』(Index to the Mahāyānasūtrālaṃkāra, 2 vols., 1958-61)と『中辺分別論釈』(Madhyāntavibhāgabhāṣya)のサンスクリット本校訂及びその梵蔵漢索引を付しての出版(1964年)である。両書の索引はチベット複合語の合成法や構文の特色がサンスクリット語との対比の上で一見して明らかになるように編集され、その周到な言語学的配慮は世界の学界で高く評価されている。

同名誉教授がその長い研究生生活のあいだに発表してきた数多くの論文のうち25篇は『中観と唯識』(1978年)の一書にまとめられた。その諸論文は中観と唯識の深い哲学的理解を示すものとして定評のある所である。

(文学部)

田畑茂二郎名誉教授



田畑名誉教授は京都府出身、昭和9年京都帝国大学法学部を卒業、直ちに同学部助手に任ぜられ、11年講師、13年助教授を経て20年教授に昇任、49年停年退官されるまで40年間にわたり、一貫して国際法学の教育と研究

に尽力された。

同名誉教授の学問的関心の範囲は甚だ広く、著書・論文は極めて多い。その学説は、思想史の学識を背景とする精緻かつ明快な論理と、国際社会の発展の方向を洞察する鋭敏な感覚とによって基礎づけられているため、強い説得力をもち、わが国の学界および外交実務・法律実務に大きな影響を及ぼしてきた。また、京都大学大学院などにおいて多数の国際法専門家を直接に指導育成されたばかりでなく、早くからわが国際法学界における最高権威者の一人として広く全国の後進研究者にも学問的感化を与えられたことも、同名誉教授の大きな業績といえる。さらにまた、国際法学会理事長、世界法学会代表理事、日本平和学会会長を歴任され、多彩な学会活動を通じて国際法学および国際政治学の発展に寄与されたほか、京都大学法学部長、日本学術会議第二部長、そして昭和49年から6年間京都府立大学学長を勤めるなどして、学術および大学教育の進展に貢献された。

同名誉教授の学問の特徴は、近代国際法の歴史

的性格および社会的基盤を明確にするとともに、その現段階における妥当の様態を分析しようとする点にある。従って、発表されたモノグラフィーは『世界政府の思想』『国家主権と国際法』『人権と国際法』『国際法における承認の理論』など、国際法の基礎理論に関するものが多い。とりわけ重要なのは『国家平等観念の転換』とその改訂版である『国家平等思想の史的系譜』および『国際法』(岩波全書)であり、これらの著書はわが国における国際法思想史研究の先駆をなす著述として注目された。すなわちここでは、国家平等観念がグロチウスでなくプーフェンドルフによって最初にはっきりと示されたものであり、また国家主権観念を基底とする近代国際法思想はヴェッテルにおいて形を整えたことを、厳密な論証をもって明らかにされた。ついで『国際法Ⅰ』(法律学全集)では、社会主義諸国およびアジア・アフリカ新興諸国の台頭によって変化を来した現代の国際社会においても、主権観念を基軸とする国際法の構造は基本的にはなお維持されていることを、さまざまな具体面にわたって実証的に論証された。そして、このような国際法基礎理論に関する深い学識にもとづいて展開された同名誉教授の体系書『国際法講義(上・下)』は、標準的な教科書として定評を受けている。

以上のように、国際法の研究に新しい方法を開拓された同名誉教授の学問的業績はまことに輝かしく、そのわが国社会科学の発展に対する貢献は偉大である。

(法学部)

外国人留学生懇親会

本年度の総長招待による外国人留学生懇親会が



12月15日（月）午後6時から、京都グランドホテルで教職員、留学生等約350名が出席して開催された。

この懇親会は、本学に在学している諸外国留学生が、総長・学部長および指導教官をはじめとする多数の教職員等と一堂に会して懇談し、理解を深めるための機会であり、昭和36年以来毎年学生部が世話してきているものである。

今回も昨年に続き、平生留学生がお世話になっている関係者を多数招き、参加していただいた。

最初に沢田敏男総長の挨拶があった後、藤原元始学生部長の発声による乾杯でパーティが始った。今回は特に琴の演奏があり、会が進むにつれて、留学生からお国自慢の歌が披露されるなどして、なごやかな雰囲気うちに、午後8時30分閉会した。

<紹介>

理学部・琵琶湖古環境実験施設

琵琶湖の湖底には、第四紀（今から遡ること凡そ250万年間）或いはその以前から溜り続けてきた湖中、湖外よりの供給物質が、そっくり保存されている。したがってこの莫大な堆積物（最厚部で厚さ1,500 m位）中に、ボーリングコアサンプラーを下して、垂直なコアサンプルを採取し、最上層から最下層まで、各時代毎に薄層に切断、各種の分析を行なうならば、上記のような長い時間の間に琵琶湖をめぐる自然環境がどのように変化を遂げてきたのかを知ることができる。それは、単に琵琶湖自体の変遷を示すに留まらず、日本列島の生成ならびに発展の歴史の研究から更には地球規模の環境変遷の研究にとっても重要な意味をもつ。例えば、日本列島に襲来した氷河時代を取り上げてみても、かつて日本の高山山頂に氷河が実存した事実は、山腹に刻まれた地形学的証拠から明らかであるが、その氷河時代の回数についてはほとんど不明のままである。また最近の氷河時代の規模を遙かに上回るような大規模な氷河が存在したか否かが問題となっているが、侵食や風化によって破壊された陸上の資料からでは、はっきりした証拠が見出せない。その点、琵琶湖の底の資料からは、例えば花粉化石、アイソトープ化学証拠等によって氷河の規模、回数等を明瞭に知ることができる。それは、琵琶湖が東西両側を大きな断層で画された構造湖で常に沈降を続けており、そのために、湖中・湖外からの生物、無生物の総ゆる物質がそっくり湖底に温存されるという構造上の特殊さに拠っている。

昭和46年、沖の島と北小松との中間、水深65 m



地点でボーリングサンプラーを下し、2ヶ月間にわたる作業の結果、200 mのコアを採取することができた。また50～51年には、野洲川河口で1,000 m掘削にも成功した。これらのサンプルは全国各地に跨る各大学の研究者の協力によって総合的な分析が行なわれ、それによって、紙面の都合上、詳しいことは省くが、例えば地磁気の逆転の様相とか、大西洋と琵琶湖との気候変化との一致等の新事実が判明した。当施設ではこれらの研究業績を基礎として一兩年の内には、琵琶湖基盤迄掘り抜くような大規模な掘削計画を予定しており、その試料は国際基準試料として用いられるだけの研究価値を有している。この準備のために、調査船「たかしま丸」（本広報 No. 195参照）建造、爆破地震動観測や、2年間にわたる湖底物理探査等を実施し、掘削の下準備はほとんど終わっている。

また、琵琶湖の発達史を研究する上で、長く孤立した環境下に置かれてきた琵琶湖特有の珍しい生物（ゲンゴロウブナ、ハス、イケチョウガイ、ナガタニシ、ヤマトカワニナ、イボカワニナ等）の由来と発達史の研究とは重要なキーポイントの一つであり、今後の重要な研究課題の一つである。

（所在地；滋賀県高島郡高島町永田）

（理学部）

<部局の動き>

第82回化学研究所研究発表会

化学研究所は、12月12日（金）午前9時30分から午後4時まで5階大会議室において、恒例の研究発表会を開催した。

演題、発表者は次のとおりであった。

多重連結ジョセフソン回路網における超伝導
の異常破壊 間崎啓匡・石田武和

反応性蒸着法による酸化物薄膜 (SnO_2 ,
 In_2O_3) の生成とその結晶学的性質

村中重利・広岡勇人・坂東尚周

抽出試薬としての4-アシル-5-ピラゾロ

ン類

松井正和・梅谷重夫・篠山員枝

FT-IR による界面化学の研究 梅村純三
球形粒子濃厚懸濁系の誘電解析法とイオン交
換樹脂粒子系への応用

花井哲也・石川 彰・小泉直一

放射線法による血液親和性材料の開発

筏 義人・鈴木昌和・岩田博夫

ゲル透過法による高分子 — 低分子間相互

作用の研究 宮本武明・門倉 暁・稲垣 博

テルル塩及び有機テルル化合物を用いる有機

合成反応 植村 栄・福沢信一・岡野正弥

ラット肝臓におけるセレノシステインの酵素

的生成機構

左右田健次・江崎信芳・中村武史

(化学研究所)

保健コーナー

アルコールと健康

アルコール性飲料は古来百薬の長として愛用されてきましたが、それほど多くの量でなくても自制力、判断力を鈍らせて、自動車事故や犯罪などを誘発しやすいことはご存知の通りです。また、アルコール依存 — アルコールなしでは仕事ができず、抑え難い飲酒欲求のため断酒できなくなり、アルコールで問題を起こす状態 — に陥りやすく、この状態が長く続けば精神障害をはじめ中枢神経、消化器、循環器、全身の物質代謝などに悪影響をおよぼして、寿命を縮めることにもなります。「初めに人は酒を飲み、終りに酒は人を飲む」と言われる魔性の一面をもっています。

アルコールの害を強調し過ぎたきらいがありますが、或る範囲内の飲酒は却って心臓病の発症率を低下させるとの疫学調査が最近になって発表されています。ここでは健康保持に対して、アルコールが敵であると同時に味方でもあることについて話題を提供してみましょう。

アルコールの弊害

アルコールのもつ薬理作用の中で最も厄介なものは前述の依存性ができることです。耐性が上昇しやすく、次第に大量のアルコールを摂るようになるところに危険性が潜んでいます。アルコールは少量でも中枢神経系の活動を統合する重要なシ

ステムに抑制的に働きます。脳の高等機能である洞察、分別、自制などの精神活動が鈍くなり、自己中心的、衝動的行動が優位になってきます。そして多量のアルコールはからだに良くないと判っていても止められなくなります。記憶の保持、再生は障害されませんが、記憶力は明らかに低下します。アルコールには1g当り5Kcalのエネルギーがあるので、つい飲み過ぎると食物を摂らなくなり、必要な栄養素やビタミン類の不足をもたらし、これが習慣的になればアルコール精神病、人格崩壊へと発展します。

末梢神経にも障害を与え、下肢のしびれ、知覚過敏、筋萎縮などが現われます。

循環器系にはアルコールが直接細胞毒として働くことのほかに、栄養素、ビタミン不足などが二次的に加わって心筋症が起こりやすく、また脳卒中の発症率を増加させます。心筋や脳の血流量は増加しないようです。

消化器系については、胃内の食物の量と質、胃疾患の有無などによりアルコールの胃に対する作用は左右されます。少量のアルコールは胃液の分泌を増加させますが、20%以上の濃度になれば胃液の分泌もペプシンの消化力も低下させ、40%以上になると胃粘膜に充血、炎症を起こさせて潰瘍の一因ともなります。小腸、大腸はあまり障害されませんが、時に便秘や下痢を起こします。肝臓では脂肪合成が促進されて脂肪肝になったり、直接細胞毒としてアルコール性肝炎を起こすことが

あります。脂肪肝は摂取を止めれば比較的早期に正常化しますが、アルコール性肝炎は肝硬変に進展することがあるので、アルコール常用者は時々検査を受ける必要があります。膵臓には膵炎、膵石症を発症させ、糖尿病になることもあります。

その他、カロリー過剰のため肥満体になり、炭水化物、脂肪、尿酸などの代謝を乱して糖尿病、動脈硬化、高血圧、脳卒中、痛風になり寿命を縮めることに連なります。また、アルコール好きの母親には未熟児の出産率が高いという報告があります。

アルコールの効用

一方、アルコールが保健上有益であることについては、古くから百薬の長、忘憂物とされ、食欲を増し、たん白や脂肪の吸収を促し、快眠が得られてストレスを解消させるものとして重用されてきたことは事実です。

アルコールは抑制剤であって興奮剤ではないことが薬理学的に解明されています。平素から精神的抑制が強いために仕事がやりにくい人には、抑制機構を軽減することになって、却って仕事の能率が上ったり、良いアイディアも生まれることにもなります。

アルコールは血清脂肪殊にコレステロールを上昇させると言われてきましたが、詳しい調査によればウィスキー、ビールは却って低下させることが動物実験によって判明しました。なお、血清リポたん白には善玉と悪玉があり、悪玉は動脈硬化を促進しますが、善玉は動脈壁その他の細胞内のコレステロールを肝臓に運び、動脈硬化を予防する作用があります。アルコールはこの善玉のリポたん白を増加させるという朗報も最近になって判

ってきました。疫学的調査によれば、1日 60 ml 以下のアルコール（清酒約 2 合）摂取は、心筋梗塞、冠動脈疾患などの発症を低下させ、それ以上の量では発症率を増加させるのではないかとされています。

急性中毒、依存の予防

急性アルコール中毒にならない方法については、各人個有の秘法があるように思われますが、量を過ぎないことが最善であることは申すまでもありません。徳を積んだ人であれば酒毒を弱めることもできそうですが、生兵法は大怪我のもとになります。凡人にも簡単に実行できることは、飲酒前に食物を摂ることでしょう。アルコールは胃から約 20%、小腸から約 80% が吸収されますが、混在する食物によって吸収が阻害されることになります。殊にタンニン、カフェイン、脂肪が効果的であることが判っています。一方、アルコールの分解を促進させるものには果糖、ビタミン B₂、C などがあります。吸収を抑え、分解を促進させるために、これらの食べ物を飲酒前に摂ることがよいとされています。茶、コーヒー、レモン、柿、バターなどがこの意味で賞用されているのは理に叶ったものと言えます。排泄を増加させるには水を多量に飲めばよいが、これには限度がありましょう。

最近巷間に伝えられる適正飲酒量はアルコールにして約 30 ml、ビールなら大びん 1 本、清酒なら 1 合程度、ウィスキーなら 60 ml とされ、しかも 1 週間のうち 1、2 日は飲まない日を作るとされていますが、さていかにがなものでしょうか。

（保健診療所 小川隆三）

日 誌

（1980年12月1日～12月31日）

- 12月1日 組換え DNA 実験安全委員会
 - ✧ タイ国 Prince of Songkla 大学学長 Tongchan Hongladarom 氏外 4 名来学、総長ならびに関係教官と懇談および学内施設見学（2日まで）
- 2日 評議会
 - ✧ 中華人民共和国中国科学院教育代表団団長（中国科学院副院長）胡 克夷氏外 7 名来学、総長ならびに関係教官と懇談および学内施設見学（4日まで）
- 6日 東南アジア研究センター創立15周年記念式

- 8日 総長、職員組合 交渉
 - ✧ 学術講演会（全学）
- 9日 附属図書館商議会
- 12日 環境保全委員会
 - ✧ 化学研究所研究発表会
- 13日 映画と講演の会一人権週間にちなんで
- 15日 外国人留学生懇親会
- 17日 同和問題委員会
 - ✧ 国際交流委員会
 - ✧ 創立七十周年記念後援会助成金選考委員会
- 26日 発明審議委員会